

大会長挨拶

日本放射線影響学会第54回大会

大会長 高橋 千太郎 京都大学原子炉実験所 教授

はじめに、東日本大震災並びに福島原子力発電所の事故により被害を受けられた皆様に心よりお見舞い申し上げます。

放射線影響科学は、放射線・原子力の安全な利用の基礎・基盤となる学問分野であり、日本放射線影響学会はこの分野の研究の発展のために昭和34年の設立以来、様々な活動を行ってきました。今回の第54回大会は、京都大学原子炉実験所が準備等を主に担当させていたしたこと、同時期に隣接した会場で開催される日本放射線腫瘍学会(JASTRO)と交流を図ること、さらに2015年には我が国で2回目となる国際放射線研究会議(ICRR)が開催されることなどから、メインテーマを「原子力・放射線の有効で安全な利用を目指した影響研究の推進—関連分野との多重奏(アンサンブル)—」とし、多様な放射線関連の科学や技術の基礎・基盤となる放射線影響科学を推進することを目的としました。今回の大会では日本放射線腫瘍学会第24回学術大会(JASTRO-24)と協議した結果、いずれかの学会で参加登録を行えば、両学会の講演等を聞くことができます。影響学会の会員の皆様は、JASTROの講演等から、放射線による腫瘍の治療が急速に進展し、その素晴らしい成果を実感していただけると思います。今回の試みを契機に、放射線腫瘍学に資する放射線影響の基礎的研究が一層発展していくことを期待しています。

一方、東京電力福島第一原子力発電所の事故とその後の状況は放射線の人体影響に関する更なる研究を求めていました。日本放射線影響学会は、放射線や原子力の安全利用に係る基礎的研究を進め、一般の方の理解増進にも努力しており、放射線の人体影響に関するテーマを特別シンポジウム、ワークショップで取り上げるとともに、一般演題でも関連した多くの研究発表がなされます。また、市民公開講座でもこれに関連した問題を取り上げます。被災地の速やかな復旧と復興に貢献できることを期待しています。放射線は医療をはじめとする様々な分野で活用されています。また、原子力は、それを我が国の基幹的なエネルギー源とするか否かの政治的判断は別として、人類にとっての新しい技術として引き続き利用されていくでしょう。分子から生態系に至る広範なレベルで安全を担保しつつ、高度な放射線の利用を進めていくうえで放射線影響科学の重要性はますます高まると考えられます。

プログラム編成に福島原子力関連の企画を急に加えることになったこと、諸般の事情により大会運営の経費が厳しかったこと、震災への対応などにより実行委員会の先生方がご多忙であったことなどから、十分な準備がかなわず、参加者の皆様にはご不便をかけることがあるかもしれません。スタッフ一同、全力で有意義な大会となるように運営にあたりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

平成23年10月吉日